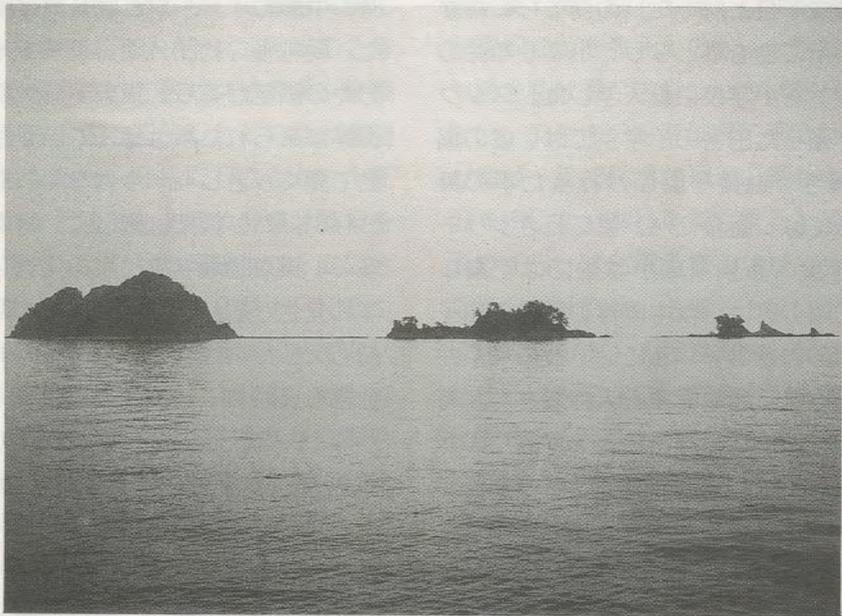


光市医師会報

平成2年7月号

No. 213



夕 風 の 島

光市医師会

我が青春の譜

丸 岩 巖

今から45年以上の昔の話である。父が陸大中退の職業軍人で、東京の参謀本部勤務となり、高円寺の陸軍中野通信学校（後にスパイ養成学校と解った）の側の杉の森が隣に有る所に住む事となり、小学6年生の時に阿佐ヶ谷小学校に転入学した。ズックが草履で通った田舎の小学生には、皮の編上靴を履き、駄菓子屋しか行った事の無かった私には、昼食にパン屋に行きクリームパンを食べる東京の小学生には吃驚した。机の隣の席は、女中同伴の男爵の息子で、田舎の方言の多い私には、彼の東京弁は苦であった。通学途中、人力屋さんが有り、威勢のいい振り鉢巻の車夫が居たのが印象に残っている。当時阿佐ヶ谷小学校では、5年で6年の全教課を済ませ、6年生は中学の受験勉強ばかりで、当時府立1中、4中、中が難しかった。田舎で普通の勉強しかしていなかった私には、可成の努力はしたが、勉強の立遅れは如何ともし難たく1流2流の中学校受験に失敗し、3流の杉並中学校入学となった。父は私の顔を見て、「情けない奴だ」と云い、私は悔し涙を流した。

そして、その日より猛勉強を始めた。翌年、山下汽船の山下太郎社長が、軍人の子弟の学校を国立の東京商大（現在の一橋大学）の先に第1山水中学（現在進学校の桐朋学園）を作った。1・2年生を募集し2年の編入試験を受け、約20名と共に第1期

生として入学した。当時校長は、S陸軍中将で、帽子は陸軍の戦闘帽、制服はカーキ色の詰襟、カバンはカーキ色の背囊で、当時の中学のイメージとは奇異な服装であった。朝礼後、約20分間、校長を始め一流の方々の訓話が有り、東条英機大将や山下社長等が来られた事は憶えているが、直立不動で聞くが苦しく、今何を聞いたか憶えていない。然し授業は厳しく、特異な先生も多く、東京物理学校出身の優秀な変った数学の先生が居り、試験は難解を究め、「お前も大した事はないな」と私の側で試験中独言を云われ、結果40点で最高、0点以上が4、5人で、後は全部0点以下であった。その頃私は、1高を目標とし、高円寺から国立迄の中央線の電車の内では、小野圭の英語の参考書を読み、学校より帰宅すると、新宿の予備校に通い、夜は1時2時迄勉強する毎日であった。その年、家より高円寺の駅に歩いて向う途中でラジオが「我軍は本未明、南太平洋において、米軍と戦闘状態にいれり」と放送して居るのを聞いた。その翌年同じ路上の空で、見慣れぬ黒い飛行機を見た。

それが最初の米軍による東京空襲であった事を後で知った。4年の3月に1高受験の予備テストの積りで広高を受験したが、製図の問題が解けず見事落ちてしまった。5年になり戦局は段々と悪化し、学徒動員で立川の飛行場に行く事となり、木工部に

配属され、大工さんに鉋の磨ぎ方、鋸の歯の目立を習い、毎日本木の模型飛行機を作っていた。その内中学5年より徴兵検査が始まるとの噂が有り、兵隊より将校の方が楽で有ろうと単純に考え、軍隊の学校を受験する事を決意した。当時視力が、海経は0.2以上、陸経は0.1以上で、0.1の私は陸経を受験する事とした。6月に試験、受験会場は「マル」の付く姓の者ばかりで数百人居たが、合格したのは私1人だった。同級の2番だったM君も合格して居た。その頃、後輩の父が太平洋の島で玉砕したとの話が屢聞される様になった。陸経に行こうか、1高受験しようかと迷った。運命の道は陸経を選んだ。翌年3番だった同級生が1高に合格したと聞いた。昭和19年8月1日10期生として陸経に入学した。1区隊40名で6区隊有り、陸士出身の大尉の中隊長、各区隊に陸士、陸経出の中尉の区隊長が指揮官だった。在学は3年で、卒業時1番には金時計、2番には銀時計が貰える事となっていた。入校当初は、時計でも狙おうかなと考えたが、全国の中学校の1、2番ばかりで、3番が居ないと云う集りで、手旗信号やモールス信号を1日で憶えたり、区隊歌を1日で作詞作曲する文武の秀才を見て3ヶ月で諦めた。入隊の日は赤飯で大馳走で酒保も有り目を丸くしたが、翌日より真黒な麦飯に変わり、1週間ぐらい食べられず残していたが、段々馴れて足りなくなった。

入隊して先、戸惑ったのが言葉であった。私が俺、君が貴様、靴がヘンジョウカ、上靴がジョウカ、ズボン下が袴下等々で、語尾の「です」が「であります」となり、小声は駄目で大声でないと「声が小さい」と

怒られた。それと自由時間は常に立って居らなければならず、腰を掛ける事は許されないのに参った。入隊後の1日は朝6時の起床ラッパに始まり午前中講義、午後軍事訓練、柔剣道、夜自習、10時就寝ラッパで1日終了であった。講義には、東大、東京商大等の高名の学者が来られ、六法全書を持って、憲法、民法、商法等を習った。語学は、英、佛、独、中国、ロシア語の内1つが選択で何を考えたのか、一番難解なロシア語を私は選び苦勞し、今は殆ど覚えていない。又午後の軍事訓練に週2回乗馬訓練が有り、最初馬場で裸馬に乗せられた時は肝を冷した。然し半年も乗ると簡単な障害飛びぐらひは出来る様になり、今でも馬に乗る自信は有る。と書くとき楽しい1日の様に思われるが、「起きろよ、起きろよ、皆起きろ、起きないと隊長さんに叱られる」と聞える起床ラッパと共に飛び起き、互違いに寝ているベット戦友と2人協力で、木の寝台の上の藁ベットに敷いた8枚の毛布、敷布、掛布を畳み、箱の様に積上げ、服を着て、校庭へと一目散に走り出、一列に並んで点呼である。6区隊の中で一番遅い区隊は、再びベットを取り又最初から遣り直しである。点呼が終ると上半身裸となり乾布摩擦である。

雪の降る寒い朝は冷く、自棄くそで大声を出し摩擦した。それが終ると暗記した。「一つ軍人は」の軍人勅諭を若松神社前で発声し、洗面、用便に次いで、食堂へ向けての整列、その間約15分ぐらひで、用便など、戸を開ける時前のボタンをはずし、内に入ったらズボンを降し、座ったら出し、拭くと同時に立ち、ズボンを上げると共に

戸に手を掛け、反対の手でボタンを閉じる。その間2・3分である。食堂での食事は、区隊長を上段に2列に坐り「食事始め」の合図で食事を始め、「食事止め」の合図で食事が終りで、その間約5・6分。食べると云うより流し込むと云う感じの早飯だった。後は分刻みのスケジュールである。きつい思い出も多くある。「敬礼が遅い、何々が悪い」と云われ、先輩より屢「眼鏡をはずせ、足を開け」でポカリと鉄拳制裁で、2・3日歯が浮いて飯が咬めず丸呑で有る。時には全責任で全員一列に並んで殴られた。又何かのミスで、区隊全員、霜の降りた夜10時過ぎ、若松神社の境内に正坐させられ、足が冷え痛みシビレ、空をみると多くの星が輝き、遠くで犬の遠吠が聞えた。又氷の張った腰迄のプールに飛び込まされた事も有った。順番を待っている方が、飛び込んだ後より寒かった。行軍訓練もきつかった。深夜暗闇の練兵場での夜間行軍は、前の者の背囊の白布を見て行軍するので、前の者が転ぶと全然方角が解らなくなった。途中小休止が有り、坐ると同時に大部分の者が眠ってしまった。又10里行軍と云うのが有った。約20~30キロの装具を付けた完全軍装で、往路5キロ、帰路5キロ、軍歌を唱っての行軍で、最初は元気が良かったが、段々疲れ果て、最後は気力で足だけが前に前にと動いている状態であった。行軍では朝4時頃起きて、代々木の練兵場に行き、各軍学校の生徒と天皇の閲兵式に参列し、白い馬に乗った軍服姿の天皇に、捧げつつをしたが、顔は遠くて解らなかった。冬は寒さと訓練で手足は全員霜焼、輝となった。当時の武蔵野は寒く、朝廊下

を水でモップで拭くと、拭いた後に薄氷が張っているくらいだった。丁度その頃左足の踵の輝に細菌が入り、蜂窩織炎を起し、医務室に行った。若い少尉の軍医が、ベットに伏せろと云い、衛生兵2・3人に押え付けている様に命じた。何をするのかと思っていると、突然メスで左踵を深く切開し、ガーゼを詰め込んだ。目の前に星が出る余りの痛さに「藪医者」と云ったら、「区隊長に云い付けるぞ」と叱られた。病床に行くのに背負ってくれた老衛生兵が「候補生殿と同じ年の息子が田舎に居るのですよ」と云われ、父の背中和錯覚した。御蔭で1週間入室し、3ヶ月跛をひいた。

楽しい思出は、入校6ヶ月が過ぎると、月2回外出が出来る事であった。朝9時から夕方5時迄東京の町へと散って行った。校内では、敬礼ばかりしていた我々には、兵長以下の兵隊が敬礼してくれるのに戸惑った。服装は第1礼服で白い手袋をし、皮の長靴を履き、颯爽として歩いた。然し、する事は食べる事ばかりで、満腹になり帰校し、翌日は殆どが下痢した。外出も、戦況の悪化、空襲で、3ヶ月で中止になった。昭和20年の春頃より、B29爆撃機による空襲が烈しくなって来た。最初は空襲警報のサイレンが鳴ると、完全軍装で防空壕に避難して居たが、余り度々なので、鉄帽、銃剣、九九式銃のみの軽装でする様になった。最初の空襲の頃は、東京の左右より無数のサーチライトが夜空を走り、その交叉した所でB29が炎上すると云う、映画を見る様な光景であった。然し、段々とサーチライトの数は減り、高射砲の弾幕も小さくなって行き、空襲は昼夜を問わず回数は増えて

いった。夜の東京の大空襲は、空が真赤になり真夜中の夕焼を見る様であった。

度々の夜の避難で段々睡眠不足になり、午前の講議で一生懸命目を開いている積りが、黒板の字が二重三重になり消えて行った。後頭部に衝撃を感じ、目を覚ますと、竹刃を握った指導教官が立って居た。

睡い思い出に不審番と云うのが、夜10時より朝6時迄2名で1時間1人立哨、1人は巡視の役目で、3~4日に1回廻って来た。最初の30分は眠りと目覚の中間ぐらいの脳の状態で、午前0~1時、1~2時の不審番が厭だった。或日、1~2時の不審番に立った途端、空襲警報が鳴り当直士官より全員避難する様命令が来た。眠け頭には、「避難しなくてよろしい」と聞え、我が区隊だけ伝えず、皆白河夜舟で寝ていた。警報はすぐに解除になったが、他の区隊は馬鹿に騒々しい。変だなと思っていたら、当直士官より直ちに来る様にとの連絡があった。1発や2発のピンタでは済まないなと覚悟して行ったら、「首を前に下げろ」と云われ、菜罐に入れた冷水を背中に流し込まれた。或夜、B29の大編隊の空襲が有り、防空壕の外で空を眺めていたら、機体から白い物体が多数落ちて来た。「危い！早く入れ」と誰か怒鳴った。てっきり、焼夷弾か爆弾だと思い、之で最後かなと考えていると、暫くして、シャリン、シャリンと音がする、出て見ると電波妨害用の錫箔の塊であった。又或日の昼、1機のB29が悠々と青空を飛んでいた。突然小さな黒い塊が、機体から離れた、「爆弾だ」と誰かが叫び防空壕へ飛び込んだ。「シューッ」と云う音と共に大音響が起り、防空壕内はマグネ

チュード5以上で生理になるかと思った。爆弾は約千米離れた所に落ち、500キロ爆弾だった。然し死者は無かった。或る時は食堂で昼食中、艦載機のグラマン戦闘機の襲撃を急に受け、蜘蛛の子を散らす様に走り、防空壕に飛び込んだ事が有った。

6月中旬頃、立川の飛行場に行軍演習に行った。飛行場には飛行機は1機も見えなかった。そこで顔の刻りの深い凜々しい東北出身の航空陸軍中尉の訓話を受けた。彼は、首都防衛の特攻戦闘機乗りであった。B29の後方より尾翼に体当りをし、自分は落下傘で脱出する方法で数機を撃墜したと云い、「明日も飛び立つかも知れぬ、死は覚悟の上で、貴様たちも後に続いて呉れ」と淡々と話し、我々は胸が詰る思いがした。数日後昼過、B29が1機、我が物顔に悠々と飛んで来た。突然、B29の上空の浮雲より、小さい飛行機が45度の角度で、B29の尾部に突込んだ。小飛行機は分解し、その中より小物体が飛び出し、補助落下傘を開かせた。然し、主落下傘はなかなか開かない、「落下傘よ開け」と見ている者は皆祈ったが、そのまま地上に消えた。B29はグラッと機体を揺がし、段々高度を下げながら、視界から消えて行った。翌日先日の中尉の戦死の報を聞いた。6月頃より、学校の食事は急に悪くなって来た。真黒な麦飯の3分の1が大豆となった。昼食がふかし芋3ヶに実の無い味噌汁となった。空腹感が身に滲む様になった。軍事訓練は匍匐訓練と蛸壺掘りばかりとなった。匍匐訓練とは、両手で銃を持ち頭を下げて、両肘、両膝、両足でみみずの様に這う事で有り、蛸壺掘りとは、自分の身が隠れる程度の穴を

掘る事である。この訓練が、早朝、昼夜と続いた。今から考えると、この訓練は米軍の本土上陸の際の対戦車用の特攻訓練であったのであろう。連日の空襲による睡眠不足、食糧不足による空腹、訓練による疲労は、人間を野獣化し、死の恐怖を無くし、死への願望すら持たす様になった。そして同区隊生がジフテリアと結核で2名病死した。戦局は末期的方向へと向い、ソ連の参戦、広島への新型爆弾の投下の報を聞いた。7月中旬頃、突然、会津若松の磐梯山の麓に移動する事となり、空襲に備え、実弾を99式銃に詰め、夜行列車で東京を後にした。

当地の小学校に宿泊し、毎日軍事訓練に明け暮れた。夜は近くの農家に遊びに行き「兵隊さん、お腹空いたでしょう」と云われ、囲炉裏に吊された大鍋に煮られた南瓜を、毎日顔が黄色くなる程食べさせて貰った。恐らく人の食べる一生分以上の南瓜を食べたのでは無いかと思う。約1ヶ月後の8月15日、重大ニュースが有ると云うので、ラジオの前に全員集合し「耐がたきを耐え、忍びがたきを忍び」に始まる細々として終戦の天皇の言葉を雑音の多いラジオ放送と共に聞いた。天皇陛下の為、日本国民の為と洗脳された頭には、虚無感のみが残り、特別な感情は湧かなかった。数日後、会津若松を後にし、東京の小平の学校に帰った。毎日茫然として、残務整理、武装解除等を行った。又高名な人を始め多数の自殺、割腹の報を聞いた。区隊長、中隊長も割腹しようかと悩んだ様であるが、結局何もなかった。その区隊長は現在東京で大商店を経営し、中隊長は最近叙勲を受けたと聞いている。

9月初旬、解散、復員と云う事が決った。

東京商大より、無試験編入学の話も有ったが、約半年も音信不通の田舎の家族の事が心配で、陸経専用の復員列車に乗った。東京、横浜、名古屋、大阪と通る町は、焼野原の連続であった。広島に着いた時、駅もプラットホームも無く、車窓より遠く宇品の海が見えた。広島出身の者は「俺の家は何処だ」と云いながら、列車より線路に飛び降り去って行った。田舎である神代駅に、1人降り立った時、女子駅員が「御苦労さんでした」と一言云った。男性駅員は見当らなかった。田舎の海や山は変わらず美しかった。家に帰ると、父は半年前、軍人を辞め、中国の済南に渡り、燃料アルコール会社を設立し、音信不明との事だった。母、弟、妹、叔母が音信不通の私が、突然帰り無事な姿を見て、涙を流して喜んだ。

弟妹も、柳中、柳女より、光海軍工廠に学徒動員され、爆撃で九死に一生を得たとの事であった。暫くして、高校の編入試験が受けられると聞き、3高、広高、山高と願書の送付を依頼したが、願書の来たのは山高だけであった。そこで山高を受験し陸士、海兵等の連中と10数名が合格した。

丁度その頃、大きな台風が中国地方を襲い、大被害を出した。その日、余りに雨風が激しいので、何時も寝る母家から、全員が別棟の部屋で寝た。夜中に「ドスッ」と云う音を聞いた。翌朝起きて見ると、裏山の土砂崩れで、母家は45度に傾き、何時も寝ていた部屋は土砂と木の根で埋っていた。

時代の大きな流れには、個人が小船に帆を張り櫓を漕いでも、所詮流されるもので有り、人間の命とが人生は、運命の糸の上

を歩いて居るもので、運命の糸には細い糸と太い糸が有り、細い糸に当たった人は、如何に努力・摂生をしようが落ちてしまう。

太い糸に当たった人は、少々無理しても落ちる事はない。然し運命の糸は太いばかり

ではない。途中細い所が有る事がある。だから誰も明日の事は解らない。と云う事を身を持って経験し、感じた17才の青春の譜であった。

新入会員紹介

(略歴)

昭和63年3月 久留米大学医学部卒

昭和63年6月～昭和63年8月

山口大学附属病院整形外科

昭和63年9月～平成元年8月

済生会山口総合病院

平成元年9月～平成2年6月

山口大学附属病院整形外科

平成2年7月～ 光市立病院

時下 梅雨の候、鬱とおしい毎日が続きますが、皆様には益々御健勝のことを心よりお慶び申し上げます。

就きましては、このたび光市立病院に勤務させて頂くことになりましたので、甚だ僭越ではございますが、小生のプロフィールを申し上げたいと存じます。生まれは宇部市で、山口県立宇部高等学校を卒業するまでは両親と同居していましたが、大学進学の際に、親元を離れ、環境が変わると、自立心、強調性、両親への感謝の気持ち、謙虚さなどに気が付きました。環境は、人の心、行動、人格、更には人生をも変え得ると申しますが、小生は光市で始まる新たな環境に期待を膨らませて参りました。趣味はテニス、ゴルフ、野球をはじめとするスポーツと、なけなしの貯金通帳の残高を見ることです。好物は、いちご、みかんと、

池田 耀裕

光市立病院 整形外科



スナックのホステスさんへの説教です。さて、元号は平成に変わりました。平成は、時は平らなり、平和に通じるといわれています。しかし、世界情勢、経済界、各界を始め、医療におきましても様々な問題があります。平和とは決して問題のないことではありません。

そうした問題を一つ一つ皆様と一致団結して解決して行くことこそが平和だと考えます。小生はさほど社会経験も豊富ではなく、若輩、未熟者です。微力ではありますが、粉骨砕身、地域医療に貢献し、平和に寄与する所存でございますので、御指導、御鞭撻、末長い御支援を賜りますよう宜しくお願い申し上げます。

また、光市医師会、光市立病院、光市民の皆様方の御健勝、御多幸、並びに今後益々の御発展をお祈り申し上げます。

6 月 度 月 間 行 事 ・ 会 議

日	曜	行 事 ・ 会 議	場 所	出 席 者
7	木	山口県学校保健連合会理事会	山 口 県 庁	福 本 会 長
10	日	研 修 会 バ ス 運 行 (第 7 3 回 県 医 学 会)	下 関 市 マ リ ン ホ テ ル	バ ス 利 用 者 1 0 名
12	火	定 例 理 事 会	光市医師会館 (商 工 会 議 所)	9 名
14	木	郡市医生涯教育担当理事協議会	県 医 師 会 館	赤 崎 理 事
14	木	郡市医住民保健担当理事協議会	県 医 師 会 館	守 友 会 員
15	金	周南地区薬物乱用防止対策 推 進 会 議	徳山環境保健所	丸 岩 理 事
16~ 20	土~ 水	国 保 審 査 会		富 恵 副 会 長
21	木	郡市医医事紛争担当理事協議会	県 医 師 会 館	丸 岩 理 事
22	金	心 電 図 研 究 会	光 市 立 病 院	光市医師会 6 名
26	火	学 術 研 究 会 会 月 例 会 会	光市保健センター	2 3 名

定 例 理 事 会

6月12日(火) 午後7時30分～

光市医師会館(光商工会議所)

出席者 福本会長、富恵副会長、丸岩、赤崎
前田、梅田、近藤、藤原、吉村各理事

(報告事項)

- 1) 郡市医師会会長会議等報告 (福本会長)
- 2) 保険担当理事協議会の報告
(近藤理事)

(協議事項)

- 1) 松岡満寿男後援会の件 (福本会長)
来年度分は請求書が届いた時点で検討する。
- 2) 事務職員の件
本俸以外の諸経費が20,704円必要である。一承認
秦さんの後任の件
- 3) 日医会費減免及B→A会員の件 (福本会長)
 - イ) 日医会費減免の件は前田(俊)先生、田尻先生が該当
 - ロ) 松村(寿)先生がB→A会員へ変更

- 4) 夜間診療調査報告書の件 (福本会長)
製本して光市医師会員にのみ配布する。
- 5) 新規開業の件 (福本会長)
高橋秀児先生より高橋眼科の開業
(平成3年2月予定)の申し出がある。
—了承
- 6) 総会の会計報告及納涼懇親会について
(梅田理事)
- イ) 総会の会計報告—了承
ロ) 納涼懇親会—7月24日開催予定
(その他)
- イ) 下松医師会50周年記念誌
ロ) 医療廃棄物の件
(経費) 4月— 152,770円
5月— 225,220円
- ハ) 医師会事務電話設置の件
- 二) 学校保健会の件
7月5日午後1時30分より開催予定
学校保健会の会長を福本会長が継続
役員—福本・富恵・中村(国)・前田
当日の講師
(医)近藤・前田・(歯)森本・(薬)野村
- ホ) 健診・予防接種等の報酬の支払の件
- ヘ) 周南医学会の件
- ト) 周南三市医師会・歯科医師会と健保組
合と協議会開催の件
- チ) 学校医大会(中国地区)の件
- リ) 周南地域医療計画協議会の報告

心電図研究会 (第24回)

光市・下松医師会合同

6月15日(金) 午後7時30分～

光市立病院

演 題 「心電図の読み方」

講 師 徳山中央病院 河野隆任先生 症 例

(1) 56才の男性。突然右不完全片マヒが出現し脳梗塞の疑いで入院。入院後左胸痛を訴え心筋梗塞を発症する。胸痛を訴える前日は心電図に異常所見が認められないのに、血液のLDH, GOT, CPK等が上昇し、すでに心筋梗塞の所見を呈していた症例。

(2) 82才の男性。左胸痛を訴え近医を受診し、ニトロール服用したが胸痛が消失しないため病院へ転送し、心筋梗塞であった症例。ニトロールを服用しても症状の改善をみない時は要注意であるとのコメント。

(Tの経時変化 陰性T→陽性Tの2症例)

(3) 67才の女性。近医で血圧が高く、胸が痛いので薬をのむと調子がよい。検診のつもりで来院され、心電図で陰性Tが見られた。診察中急に胸が苦しくなり、心電図をとると陽性Tになっていた症例。

(4) 60才の男性。左胸痛を繰り返す。運動負荷で陰性Tが陽性Tになった症例。

※ Tの経時変化は病態の悪い状態で、冠動脈所見が強い事を示す。

月 例 会

6月26日(火) 研修会終了後～

光市保健センター

(報告・協議事項)

- 1) 周南医学会の件 (福本会長)
- 2) 健診・予防接種支払方法の件 (福本会長)
- 3) 新規開業の件 (福本会長)

- 4) 郡市医師会長会議の報告 (福本会長)
- 5) 周南地区薬物乱用防止対策推進会議
の報告 (丸岩理事)
- 6) 医事紛争担当理事協議会の報告
(丸岩理事)
- 7) 保険担当理事協議会の報告
(近藤理事)
- 8) 住民保健担当理事協議会の報告
(守友会員)
- 9) その他
 - イ) 山口県医師会生涯教育セミナーの件
 - ロ) 納涼懇親会の開催について
7月24日(火) 午後7時より
於マーメイド
 - ハ) MR I 勉強会の開催について
 - ニ) 痴呆性老人を考える集いに関する件
 - ホ) 医療機関従業員労働条件の自主点検に
関する件
 - ヘ) 今年度の医療監視経営管理および衛生
検査所指導実施について
(以上福本会長)
 - ト) 納税組合関係 (渡辺会員)

学術講演会

6月26日(火) 午後7時～
光市保健センター

演 題 「乳ガン検診から精密検査」
講 師 国立岩国病院 小長英二先生



◇◇本庶先生・福本先生受賞◇◇

第44回山口県医師会総会(6月10日・於下関市)で光市医師会から本庶先生、福本先生が表彰を受けられる。

福本先生表彰

「役員・代議員・予備代議員・郡市医師会長通算10年以上」の表彰



本庶先生表彰

「長寿会員」の表彰

＝ 編集後記 ＝

湿度の高いうっとおいしい日が続きます。丸岩先生に青春の1ページを彩る長編を書いていただきました。有難うございました。

新入会の池田先生には私の不手際から、原稿を1日で書いていただく羽目になりました。お詫び申し上げます。

きびしい暑さに向います。ご自愛下さい。
(吉村)

発行所	光市医師会 TEL 0833 72-2234
発行者	福本寿雄
編集者	会報編集委員会
印刷所	光市御崎町 中村印刷株式会社